



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	キリスト教教育の位置づけの問題
Author(s)	伊藤, 悟
Citation	基督教学, 32, 29-32
Issue Date	1997-06-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46585
Type	journal article
File Information	32_29-32.pdf



キリスト教教育の 位置づけの問題

伊藤 悟

1 はじめに

キリスト教教育のかたちは、社会的コンテキストを背景にして変遷を遂げてきた。だが社会の諸問題の中でキリスト教教育が何をなし得るのかを考察しようとするばかりに、キリスト教教育が、状況打開的、現状打破的な手段として用いられてきた傾向もある。つまり、キリスト教教育は多くの場合、表面的には教育方法論の側からしか捉えられず、わが国でも「学」としてのキリスト教教育が発達することはこれまでほとんどなかったのである。

今日状況下におけるキリスト教教育を、J・シーモアとD・ミラーは、「宗教教授中心のアプローチ」「信仰

共同体中心のアプローチ」「霊的・精神的成長中心のアプローチ」「解放中心のアプローチ」「解釈中心のアプローチ」の五つに類型化することを試みている (Seymour and Miller 1982)。また、メアリー・ボーイズも、今世紀のキリスト教教育を、①宣教型、②宗教情操教育型、③キリスト教教育型、④カトリック・カテキズム型の四つに類型化している。

こうした類型化の作業によって改めて明らかにされたのは、「キリスト教と教育の関係」、すなわちキリスト教教育における「キリスト教」の位置づけの問題、あるいは「キリスト教と教育」の間の権威問題である。最近では、キリスト教教育を人間教育と称し、人間教育を、人権教育、平和問題、環境問題、正義の問題などに置き換えて具体化させ、キリスト教社会と非キリスト教社会の共通基盤を確立しようとする動きも見られる。

2 「教会の社会学的シフト」と キリスト教教育

高崎毅は、「人がどのようなキリスト教教育論をもつか

は、全くその人の教会論によるのであり、キリスト教教育に対する態度決定は、その人の教会への告白の形であると考えざるを得ない」(高崎1952, 1)と述べ、キリスト教教育を「教会への告白のかたち」であると主張する。キリスト教教育は、人的営みであると同時に、それ以上に神的営みであることが承認されねばならない。キリスト教教育が、神的営みであるかどうかは、その教育が教会性をもち得るかどうにかかっており、この神的営みを承認するかがキリスト教教育がキリスト教教育たる第一の根拠となる。

しかしながら、一九七〇年以降、解放の神学などの影響もあって、キリスト教会内部では多くの社会的諸問題が取り上げられるようになり、キリスト教教育もこの影響を受けるようになった。これを「キリスト教会の社会的シフト」と称して批判したのは、S・ハワーワスである(Hauerwas and Willimon 1989, 39)。また、D・ブラウニングも、教会教育が共和制民主主義のための市民教育にすり替えられてきたことを鋭く指摘している(Browning 1991, 214)。

ハワーワスは、「保守であるかりベラルであるかを問わず、多くの牧師たちは、自分たちの課題は人々を政治運動に巻き込むことだと考えてきた。彼らは政治運動以外に、正義を達成する道を見出せなかった」(Hauerwas 1989, 31)と述べる。また、「教会は、どうしたら世界がスムーズに動きそれが維持されるのかを問うためや、人々にそのための行動を起こさせるために存在しているのではない。(中略)教会には、教会独自の存在理由があり、この世に見出すことの出来ない独自の使命のもとに存在している」(Hauerwas 1989, 39)とも述べている。

キリスト教教育は、教会の教会観に左右される。「教会の社会的シフト」のもとでは、教会は、社会構造を様々な角度から学習し、現実の諸問題の解決のために各々がなせる業を探し求めることがキリスト教教育の課題となる。それは、究極的には、社会変革を求めることであり、かなりの部分でキリスト教関係以外の人々とも共働することになる。そうすると、必然的にヒューマニズム的要素が共働者相互の共通項となり、神学や独自の教義は相対化されていくことになる。また、諸問題に無関心であ

ることを「罪」と捉え、弱者を覚え、それを救済することを教会の大きな使命とするようになる。こうした教会観のもとでは、キリスト教教育も福音内容（聖書）の伝達や霊的救済というよりも、即戦力として社会活動に参加できる人間の形成を目指すことになる。

3 「教育の神学」の形成へ

今日のキリスト教教育の混迷は教会の混迷であり、教会の混迷は神学の混乱に起因する。キリスト教教育は、教育の可能性を人間性の中ではなく、福音のうちに見出し、その可能性の中に人間の営みとしての教育を置くことである。その点で、従来のキリスト教教育の捉え方、すなわち教育学の中のキリスト教的アプローチと、神学的視点から教育を考えていこうとする「教育の神学」とを、「学」の上で区別することが必要と思われる。何故なら、キリストの福音、そしてキリスト教の伝統はこれまで明らかに教会が担ってきたものであって、キリスト教教育は教会の保持する福音を離れてはその存在意義を喪失してしまうからである。キリスト教教育学が「学」と

して確立されるためには、キリスト教教育が「教会論」「神学的人間論」に基礎付けられなければならない。

「教育の神学」はキリスト教教育を教育学に基礎付けるのではなく、教育とは何なのかを、キリスト教信仰の立場から問い研究する神学である。キリスト教教育は、単なる伝道や人格教育の方法論ではなく、終末論的視点による教会形成 Discipleship であって、神学的に教会の中に正しく位置づけられなければならないところの「教会の学」である。

今後のわれわれの課題は、教会の究極的使命を神学的に探求するという普遍的教会論確立への営みのなかにキリスト教教育を位置づけて「教育の神学」構築を試みていくことであろう。

【参考文献】

Paul Tillich, "A Theology of Education," in *Theology of Culture*, ed. by Robert C. Kimball, New York: Oxford Univ. Press, 1959.
Jack L. Seymour and Donald E. Miller, ed., *Contempo-*

ary Approaches to Christian Education, Abingdon Press, 1982.

Mary Boys, "Religious Education: A Map of the Field," in *Education for Citizenship and Discipleship*, ed. by Mary Boys, New York: Pilgrim Press, 1989.

高崎 毅『基督教教育』新教出版社 一九五二年。

Stanley Hauerwas and William H. Willimon, *Resident Aliens*, Abingdon Press, 1989.

Don S. Browning, *A Fundamental Practical Theology: Descriptive and Strategic*, Fortress Press, 1991.

大木英夫「教育の神学」学校伝道研究会編『教育の神学』ヨルダン社 一九八七年。